

1	名古屋	丸の内小学校	アサイ ショウタ
			浅井 翔太
	分科会番号	2	分科会名
			外国語教育

研究題目

自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えることができる児童の育成 ～友達との関わりと SET（自由進度学習）を通して～

1 研究のねらい

2024年度になり、名古屋市の学校教育は大きな転換期を迎えた。昨年度には、名古屋市のめざす子ども中心の学びの考え方を明確にする、学びの指針である「ナゴヤ学びのコンパス」が策定され、私たち教職員は、子どもたち自らが考え、主体的に学びに向かうような、自律した学び手を育てることができる学びを実現させる必要がある。

本校の児童は、明るく活動的で、友達と積極的に関わろうとする児童が多い。外国語科の授業でも友達と英語で積極的にやり取りをする様子が見られる。しかし、スピーチなど自分の思いや考えを大勢の前で発表する場では、不安を感じて声が小さくなったり、恥ずかしがったりする児童もいる。

4月の実践前に行ったアンケート調査では、「外国語で友達とやり取りをするのは好きですか」【図1】という問いに、15人の児童が「好き／まあ好き」と答えている。しかし、「自分の伝えたいことを英語で言うことができますか」【図2】という問いに、「できている／少しできている」と答えた児童は14人であった。

理由を聞くと、「英語はもともと苦手で、発表をするとなると緊張してしまう」「自分の英語が伝わっているのか正直分からない」という声が挙がった。

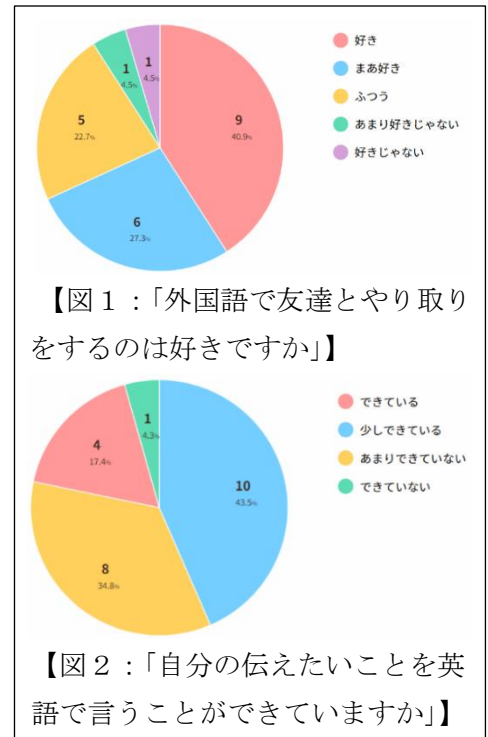
これらのことから、友達とのやり取りは実際に楽しいと感じており、英語を使って友達と関わりたいという気持ちはあることが分かる。しかし、英語を話すことへの自信のなさや自分の英語が伝わっているという実感がもてないことから、積極的にコミュニケーションを図ることができないということがアンケート調査により明らかとなった。

そこで私は、児童に英語を話すことへの自信をもたせること、英語が相手に伝わっているという実感をもちたせることができれば、自分の思いや考えを相手に分かりやすく伝えることができるのではないかと考えた。

外国語科の授業においても、できるだけ自分に合った進度や学習方法、学習内容を選んだり決めたりする「学習の個性化」を大切にし、自律して学び続ける児童の育成をしていきたいと考える。

また、友達との関わりを通して、児童が必要に応じて仲間や大人の力を借りたり、人に自分の力を貸したりする「ゆるやかな協働性」を大事にしたい。

そのためには、英語というツールを使い、自分の考えや思いを友達にもっと分かりやすく伝えたいという自信をもたせ、相手に自分の英語が伝わったことを実感しながら活動に取り組むことが大切である。そこで、以下の2点を手立てとして設定し、どちらの手立てにおいても友達との関わりの中で活動を行うことができるよう計画していく。



2 研究の手立て

(1) 学習の個性化

【手立て1】Self Education Time (SET)

自分の考えや思いを相手に伝えるためには、まず、自分の考えや思いを明確にもつ必要がある。

そこで、「話すこと（やり取り・発表）」が中心の言語活動である、「Enjoy Communication」で行う練習を、「Self Education Time=SET」【資料1】と名付け、自由進度学習形式で何度も繰り返し行うこととする。児童一人ひとりが自分のペースで学習を進めるので、伝えたいという思いや自分なりの考えに教師が寄り添うことができると考えたからである。

SETでは、「03 原稿の整理」として、ワークシートの記述を基に、発表の文章を見直す活動を行う。ここでは、過去に学習した既習表現をまとめたプリントを児童に配布してスピーチの文章の見直しをさせる中で、自分のもった思いや考えをより具体的なものにする。

また、SETでは、聞くことが中心の「Starting Out」やリズムに合わせて外国語に慣れ親しむ「Let's Chant」、絵辞書「My Picture Dictionary」にある二次元コードをタブレットで読み込んで繰り返し聞いたり、練習させたりする活動も取り入れている。SET内でやるべきことを分かるように細分化することで、自由進度学習の中でも、自分の考えや思いを発表する練習が円滑に進むようになると思う。また、一人ひとりに合った方法で練習に取り組ませることで、繰り返し何度も言語材料に触れる機会を増やすことができ、自分のもった考えや思いを分かりやすく伝える手立てにもつなげることができる。

(2) ゆるやかな協働性

【手立て2】タブレットの動画機能の活用とSR (Speech Review) カードでの振り返り

相手に分かりやすく伝えるためには、自分の発表の様子を視覚的に振り返る機会が大切だと考える。

そこで、「Enjoy Communication」で行うスピーチの練習や発表の様子を、タブレット端末を使用して友達同士で撮影させる。その動画を見ながら振り返りカード「SR (Speech Review) カード」【資料2】にスピーチについて記入をする。

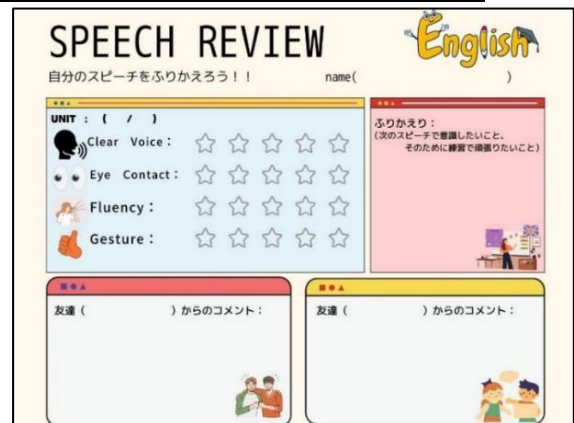
「SRカード」では、大きな声で伝えることができたか (Clear voice)、すらすらと言うことができたか (Fluency)、目を見て話すことができたか (Eye contact)、ジェスチャーを交えてスピーチをすることができたか (Gesture) の4つの評価項目を設定し、各項目5段階で自己評価をさせ、自分の成果や課題を振り返らせる。

次に、自己評価だけでなく、他者評価も取り入れた活動を行う。ペアの児童に自分の動画を見せ、フィードバックとしてコメントを書いてもらう。感想やアドバイスを記述することで「相手により分かりやすく伝えるためにはどうしたらよいか」を具体的に考えることができる。

最後に、スピーチで意識したいポイントを記述させ、それを基にスピーチの練習を繰り返すことで、自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えることができるようになると思う。





【資料1 : Self Education Time(SET)の流れ】



【資料2 : SR (Speech Review) カード】

3 実践計画 【対象：第6学年2組 23人（男子10人、女子13人）】

 <p>みんなが分かるような英語で自分の考えや思いを伝えられた！</p>		
<p>自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えることができる児童の育成</p>		
第2次実践 「My Weekend」	<ul style="list-style-type: none"> 自由進度学習による個別最適な学習方法の選択 考えや思いの整理(AETによる音声録音カードと原稿フローチャートの活用) 	<ul style="list-style-type: none"> スピーチの発表方法と内容の振り返り 友達からのフィードバック（発表方法と内容）
第1次実践 「My Daily Schedule」	<ul style="list-style-type: none"> 自由進度学習による個別最適な学習方法の選択 考えや思いの整理(ワークシートの活用) 	<ul style="list-style-type: none"> スピーチの発表方法の振り返り 友達からのフィードバック（発表方法）
手立て	<p>手立て① 自分の考えや思いをもつ手立て</p> <p>Self Education Time</p> <p>学習の個性化</p>	<p>手立て② 相手に分かりやすく伝えるための手立て</p> <p>Speech Review</p> <p>ゆるやかな協働性</p>
 <p>英語でなんて言ったらよいか分からない、自分の英語は相手に伝わっているのだろうか...</p>		
<p>自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えることができない児童</p>		

4 実践の様子

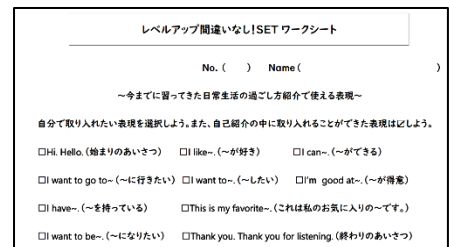
(1) 第1次実践 (Unit 2 My Daily Schedule)

本単元の1～4時では、発表の中心となる日常生活に関する基本の4文をプリントに書かせた。その後、相手に発表することを意識しながら言う練習をするように指示を出したが、ただプリントを見ながら声に出して練習するだけで、より良いスピーチをするために、どのように練習すればよいか分かっていない様子が見られた。

そこで、スピーチの練習の時間として、SET（自由進度学習）を設けた。SETが始まるとLet's Chantを聞きながらチャンツを口ずさんだり(SET-01)、My Picture Dictionaryの二次元コードを読み取って、基本文で使われている単語の発音を聞き、練習したり(SET-02)、自分の発表を動画で撮影し、よい点と課題点を考えたりする(SET-04)など、それぞれが自分に合った活動を選択し、スピーチの練習に取り組む姿が見られた。

また、SETが始まったときに、SETの流れとその単元のスピーチで使える既習事項やスピーチで意識するポイントが書かれたSETワークシートを用意した。【資料3】そうすることで、自分の話したいことをより相手に伝えられるように、基本の4文だけでなく、既習表現を使い相手に伝わりやすい文を追加する児童の姿が多く見られた。(SET-03) 友達とのスピーチ練習【資料4】では、動画を確認し合い、「もっと顔を上げて、目線をこっちにすると良いよ」や「声を大きくすると良いよ」など、友達同士アドバイスを送り合っていた。(SET-05)

SETの後、ペアの友達に発表する活動を行った。まず相手の動画を撮影し、その動画を確認し合い、SRカードを使ってそれぞれがスピーチの自己評価を行った後、ペアにフィードバックを送り合った。活動が始まると、動画を観ることに集中しながら、積極的に自分のスピーチを評価し、そ



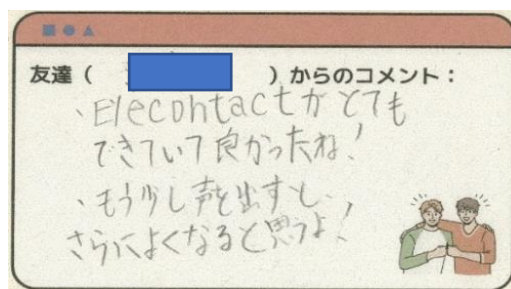
【資料3：SETワークシート（一部抜粋）】



【資料4：友達からスピーチのアドバイスをもらう様子(SET-05)】

の様子から次に生かせることを自ら見付けようとする姿が見られた。「意外と前を見て言えているな」「思ったより声が小さくて聞こえづらい」という児童の声が挙がった。

友達に自分の動画を見せて、フィードバックをもらう時間には、「A児は、アイコンタクトがしっかりできているから、伝わりやすい」や「はっきり英語が聞き取ることができるからもっと（Clear voice の）星の数を多くしても良い」など、自己評価だけでは気付かなかったことをペアの友達から教わり、相手により分かりやすいスピーチとは何かを意識することができる児童が増えた。



【資料5：SRカードの友達からのコメント】

第1次実践では、Clear Voice, Eye Contact, Fluency, Gesture を意識させてスピーチをさせ、友達からの客観的なアドバイスをもらったことで、スピーチをする際にはより相手に伝わりやすく、相手を意識したスピーチをすることができた。しかし、振り返りで、スピーチの内容面に注目させることができなかつたため、内容面に関するフィードバックを友達からもらうことで、より相手に英語が伝わったという実感をもつことができるのではないかと考える。

【第1次実践の成果と課題】 成果：○ 課題：●

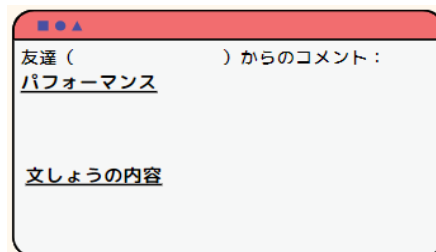
- 自分のスピーチの課題を見付け、アドバイスをし合って練習をしたり、練習時と発表時の映像を比較して確認したりすることにより、良い点・課題点を共有・実感しながら、意欲的に学習に取り組むことができた。
- ペアの友達からSRカードにコメントをもらう活動をしたことで、児童は自分の気付いてない部分を知ることにつながり、良い部分を認めてもらうことで自己肯定感が上昇した。
- SRカードの評価項目が、声の大きさや目線などの発表の仕方に関することに偏ってしまい、スピーチの内容面に着目した振り返りを行うことができなかった。
- 既習事項をまとめたプリントを活用して原稿の整理をさせる際に、プリントに書かれた英語の読み方が分からず、スピーチの内容を充実させることができなかった児童がいた。

【改善点】

- 原稿を整理するとき、ロイロノートの録画機能を利用して、動画付きの文章カードを活用する。児童にとって身近なAETの発話を録画し、文章が読めない児童にも使いやすいようにする。
- SRカードの振り返りの項目を、発表の仕方や工夫だけに限定するのではなく、文章の構成や内容面（Sentence）着目できるようにする。
- 友達からもらうコメント欄も同様に、発表面と内容面の二つの観点から評価できるよう、コメント欄を変更する。
- SET中に、ロイロノートの児童間での通信や、提出箱の共有機能を活用することで、より多くの友達の練習の様子を見ることができるようにする。
- 友達の動画を見ることができた時には、相手に良かったところや課題を伝えるようにすることで、多くの友達からのフィードバックをもらうことができるようにする。



【資料6：動画付きの文章カード】



【資料7：内容面への気付き】

(2) 第2次実践 (Unit 3 My Weekend)

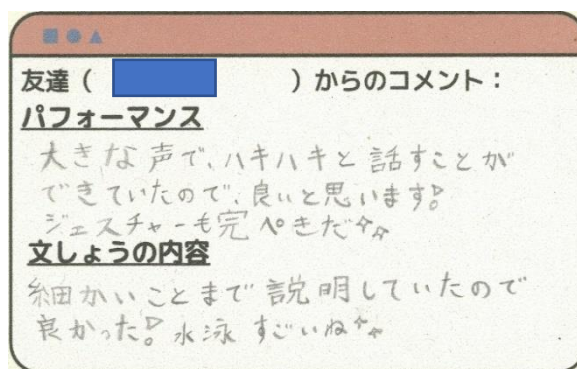
第2次実践では、第1次実践と同様、スピーチの準備としてまず始めに、週末に関する基本の4文をプリントに書かせた。次に、ロイロノートのシンキングツールを使って、話す内容の整理をさせた。ツール内のカードを移動させ文章の順番を容易に変えられたことや、その単元で使える既習事項の文章も文章カードとしてすぐ使用できるように準備しておいたことで、自分が週末にしたことをより詳しく伝えるために、発表の文章を増やしていこうとする児童の様子が見られた。

ロイロノートの話す内容が決まった後、スピーチの練習タイムとしてSETを設けた。第2次実践では、聞く活動 (SET-02) において、ロイロノートの文章カードにAETの音声データを添付したことにより、「あっ、この文こうやって言うんだった」というように自分のスピーチの文章をすぐに聞いて確認することができた。既習事項の文章の発音もすぐに確認できるようになったことで、話す順番の整理 (SET-03) で相手により伝わりやすくなるよう積極的に文を追加したり、相手を意識して尋ねる文章を途中で挟んだり、個人練習 (SET-04) や友達との練習 (SET-05) にスムーズに移行することができ、発表の練習の時間を十分に確保することができた。

また、第2次実践ではロイロノートの児童間での通信や、提出箱の共有機能を活用した。そうすることで、友達との練習中 (SET-05) に「スピーチの動画を送るから、アドバイスをちょうだい」「〇〇さんの伝え方、顔がよく前を向いているから分かりやすいね」と、友達の動画をたくさん見て、自分のスピーチに生かしたり、活発にアドバイスを送ったりする姿が見られた。

SETの後、ペアの友達へのスピーチの発表、SRカードを使った自己評価とフィードバックによる振り返り活動を行った。

第2次実践では、自己評価において、「文章の『内容』を充実させることができたか」、「相手に伝えたいことを伝えられたか」という項目を増やした。また、発表面と内容面の二つの観点で友達からフィードバックをもらった。細かい説明まで相手に理解してもらうことで、英語が相手に伝わったという実感を得ることができた。



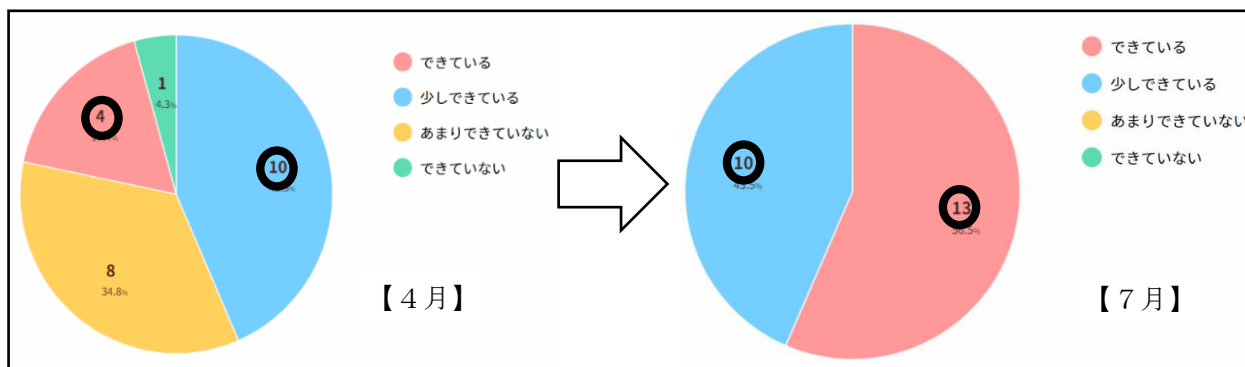
【資料8：友達からのフィードバック】

【第2次実践の成果と課題】 成果:○ 課題:●

- ロイロノートの文章カードにAETの動画や音声添付したことで、児童が既習事項を繰り返し確認することができ、個人練習の場面 (SET) で個々のペースに合わせて活動を進めることができ、教師は困り感のある児童の支援をすることができた。
- SET中に、ロイロノートの児童間での通信や、提出箱の共有機能を活用したことで、様々な友達の練習の様子をその場で確認することができ、互いに動画を見た感想やフィードバックを送り合うなど活発に意見を交流し、自分の思いや考えが相手に伝わるように試行錯誤する姿が見られた。
- 振り返りの時間では、発表面だけでなく内容面にも着目させることによって、より相手に自分の発表が伝わったという実感をもたせることができた。
- 振り返りを各単元のSETの後でしか行えなかったため、もっと振り返りの機会を設けられると良かった。そうすることで、自分のスピーチの課題を改善するという意識の定着をさらに継続して行うことができたと考えられる。

5 実践のまとめ

実践後に、実践前に行ったアンケートと同じ項目でアンケート調査を行った。



【図3：実践前（4月）と実践後（7月）のアンケート調査結果の比較】

アンケートの結果を比べると、「自分の伝えたいことを英語で言うことができますか」という質問に「できている／少しできている」と回答した児童が実践前【4月】は14人だったのに対し、実践後【7月】には23人全員が「できている／少しできている」と回答していた。自分ができるようになったことを児童に尋ねてみると、「伝えたい文章をたくさん増やすことができるようになった。」「相手に伝わりやすいように文の順番を考えることが出来るようになった」という、より相手に伝わりやすくなるように、相手を意識して文章の内容や構成を考えることが出来るようになった。また、「最初は棒読みだったけど場合に応じて発音の仕方を変えられるようになって、発音が良くなった。」「ジェスチャーを入れて発表することができるようになった」という、相手により伝わりやすいように意識して発表の仕方を工夫することができるようになった。

最初は分かる人に全部聞いて内容をつかっていただけで、だんだん自分で調べて文章をつくれるようになった。みんなに分かるような内容をつくるのが楽しかった。内容をつくらているうちに昔習ったことを思い出したりできた。
最初はあまり文章の内容を深く掘り下げていくことができなかったけど、最近は文章を深く掘り下げてつくることができるようになった。相手に自分が伝えたいことを細かく正確に伝えることができるようになってうれしかった。
ジェスチャーができるようになって、さらに相手に伝えたいことが伝えられるようになった。
伝えたい内容をたくさんプラスできるようになった。相手に伝わりやすいように文の順番を考えることができるようになった。

【図4】実践を通してできるようになったこと（一部抜粋）

また、発表前の Self Education Time (SET) の中で、自分に合った進度や学習方法を選択して、タブレットの音声聞いて練習をしたり、話す順番の整理を行った後、SR (Speech Review) カードを用いた振り返り活動において、自分の発表を見ていた友達からの客観的なフィードバックを受け取ったことや、友達とスピーチのアドバイスを送り合ったりしたことにより、自分の発表がより相手に伝わりやすくなるよう、発表の仕方と文章の内容の両面を工夫できるようになったと考える。

これらの結果から、自分の思いや考えを相手に分かりやすく伝えることができる児童を育てるためには、「Self Education Time (SET) 」と「タブレットの動画機能の活用と SR (Speech Review) カード」を行うことが有効であることが分かった。

しかし、児童が学びたいように学び、友達と関わりがある活動をさせれば良いというわけではない。教師が児童に適切なペースや方法で学べるように準備をし、多様な人と学び合えるような環境づくりをする必要がある。また、外国語科だけでなく他教科等においても「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業を行うことで、「ナゴヤ学びのコンパス」にもある「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子ども」を育成していきたい。